国府台女子学院 小学部だより

市川市菅野３－２４－１
Ｔｅｌ　０４７－３２２－５６４４
Ｆａｘ　０４７－３２２－５６５５
https://www.konodai-gs.ac.jp/

２０２４年５月号　　５月７日発行

ゆいまーる

6年生は、4月23日から26日の3泊4日の日程で、沖縄へ修学旅行に行ってきました。天気予報は毎日雨でしたが、実際に傘を使ったのは初日の空港からバスに乗り込むときだけで、タイミングよく雨を避けて活動することができました。3日目のカヌー体験の時には激しい雨に降られましたが、元々濡れる覚悟で臨んでいたので、楽しくカヌー体験ができました。

感心したのは、子供たちは活動と活動の合間に心に残ったことをしおりにメモを残していたことです。ただ予定をこなすのではなく、しっかりと目的意識をもって活動している姿はさすが6年生でした。また、集団で動くことを考えて日を追うごとに時間を守ろうとする姿や、班で協力する姿が多く見られたように思いました。

「ゆいまーる」は沖縄の方言で助け合いを意味することばです。子供たちがガイドさんから教えてもらって自然と口ずさんでいた琉球民謡『ゆいゆい』の歌詞の一部です。「・・・ひとりでお仕事疲れるね ふたりでやると楽しいよ・・・みんなでやればことばが（↗）（↘）弾む・・・ゆいゆいゆい　ゆいゆいゆい　ゆいまーる♪♪」子供たちが歌っている様子に思わず心が緩みました。ゆいまーるの心が広がりますように。

平和について考え、体験を楽しみ、友だち同士の交流を深め、協力する大切さを感じた4日間でした。

５　月　行　事　予　定

1日　5年校外学習
　　6年租税教室
2日　1年生を迎える会
3日　祝　憲法記念日
4日　祝　みどりの日
5日　祝　こどもの日
6日　振替休日
8日　1年校外学習
　　2年校外学習
9日　創立97年周年記念式
　　母への感謝式
　　1～3年自宅学習
　　4～6年登校
10日　1年交通安全教室
11日　第1回学校説明会(受験者対象)
　　休業日
13日　朝会
14日　クラブ
15日　学校見学会(受験者対象)
16日　健康診断
17日　宗祖降誕会
18日　授業参観、引渡訓練
21日　職員会議
25日　休業日
28日　クラブ

ようこそ国府台女学院へ
～１年生を迎える会～

5月2日、全校で1年生を迎える会が行われました。

2年生から5年生が並んでいる中を6年生と手をつないだ1年生が入場。在校生が歓迎の歌として「世界中の子どもたちが」を手話付きで歌いました。各クラスから歓迎のことばや学校にまつわる〇×クイズで盛り上がった後、1年生からの歌のお返しがありました。1年生からは「楽しい！」という声があがったり、たくさんの笑顔がこぼれたりしていました。

上級生には1年生のすてきなお手本になってほしいと思います。そして、1年生にはすてきな上級生をみならって、元気に学校生活を送ってほしいと思います。

今月の目標

「きまりを守って、落ち着いた生活をしよう。」

宗祖降誕会について

浄土真宗の開祖 親鸞聖人は、平安時代末の1173年 4 月 1 日(現在の 5 月 21 日)に、京都市南東に位置する日野の里で誕生しました。父親は、日野有範(ありのり)、母親は吉光女(きっこうにょ)と伝えられ、幼名は「松若麿(まつわかまろ)」や「十八公麿(まつまろ)」とも呼ばれていました。ちなみに「十八公」を「まつ」と呼ぶのは、「松」を分解すると「十八公」となるからです。この「十八」という数字で思い浮かぶのが、得意な芸のことを「十八番(おはこ)」と呼ぶことです。この「十八番(おはこ)」は、19 世紀に歌舞伎の名跡である市川家が得意演目 18 番の台本を、立派な「御箱」に保管して大切にしたことが由来であると言われていますが、他の説に「48 個ある阿弥陀仏の誓願(せいがん)の内、『命あるもの全てを救うという 18 番目の願い』が飛び抜けて優れている」ことが由来になったという説があります。その阿弥陀仏の救いを心のよりどころとした人生を歩んだ親鸞聖人は、4 歳の時に父親が政治の争いに敗れ、家族を捨て出奔してしまいます。そして、8 歳になった時には母親も亡くなってしまいます。幼年期に両親を失い、少年・青年期は比叡山で修行に明け暮れ、三十代間際にやっと信頼のおける師匠の法然上人に出会ったと思ったのは一瞬で、念仏によって救われるという教えにより比叡山や奈良仏教の逆鱗に触れ、師匠と引き離され佐渡へ流罪となってしまいました。そして、中年・壮年期の聖人は家族を連れての流浪生活を送り、老年期は長男とも縁を断ち、ひとり京都で隠遁生活を送って最期を迎えました。一見すると不幸の連続のような人生ですが、聖人は老人になっても、師匠の法然上人から教わった「罪をおかしてしまう弱い私であるからこそ阿弥陀仏は救ってくれるのだよ」という阿弥陀仏の慈悲心を大切にし、穏やかな心で生きていました。「不幸で恵まれない人生である」とやけっぱちになるのではなく、どんな時でも仏さまや人々の縁や自然の恵みによって「私」は「生かされて生きている」と気付く人生の方が幸せではないでしょうか。